

中国における高齢者の学習と生きがいに関する研究 —天津市老年人大学を事例として—

神 部 純 一
(滋賀大学)

1. 研究の目的

中国で65歳以上の高齢者人口の率が、7.00%に到達したのは、2000年のことである。この率は、平均寿命の伸びと年少人口の減少により今後も伸び続け、2020年には12.04%、2050年には23.07%に達すると予想されている。そしてその頃の中国の高齢者人口は、3.23億人に達するという⁽¹⁾。

こうした状況の中で、中国でも、高齢期を生きがいのある、豊かな時期にしていくために、高齢者教育の果たす役割はますます重要になるであろう。中国における高齢者教育研究の歴史はまだ浅く、1980年代以降、老年大学の設置とその発展の中で行われてきた。老年大学の設置とともに、大学の運営方針や教育内容等に関する研究が行われるようになり、1988年に中国老年大学協会が設立されて以降、組織的・計画的な高齢者教育研究が行われるようになったのである⁽²⁾。2005年末現在、中国の老年大学(学校)は2.6万校を超え、在学者数は230余万人に達している⁽³⁾。

本研究の目的は、中国の代表的な老年大学の一つである「天津市老年人大学」で学ぶ高齢者を対象とした調査結果を基に、高齢者の「生きがい」と「学習」の関係を明らかにすることである。

中国の高齢者の「生きがい」に関する先行研究としては、例えば、高齢者能力開発研究会（代表・高橋勇悦）が長寿社会開発センターの委託事業として行った『高齢者の生きがいに関する国際比較研究』がある。この中の中国の部分では、5人の高齢者に対する面接調査が行われ、高齢者の「生きがい」は、仕事を通じての社会的な貢献・奉仕と伝統的な家族制度における家族・親族の交流と深く関わっていることを明らかにしている⁴⁾。

また、中国における高齢者の「生きがい」と「学習」の問題を扱った研究としては、謝保群の『中日両国における高齢者生涯学習支援体制の現状と課題』がある。この研究では、中日両国の高齢学習者と一般学習者を対象に、生きがいと学習に関する調査が行われた。後述するように、「生きがい」は「生きがいの源泉・対象」と「生きがい感」に分けられる。この研究でもこの両面が意識されていたが、主には、「生きがいの源泉・対象」の面からの分析・考察が行われていた。

そこで本研究では、「生きがい」の中でも「生きがい感」の方に焦点をあてて、「生きがい」と「学習」の関係について検討してみたい。

2. 研究の方法

（1）アンケート調査の実施

天津市老年人大学生を対象に、「高齢者の生涯学習と生きがい」に関するアンケート調査を実施した（調査対象780名、回収663名、回収率85.0%）⁵⁾。

回答者の属性分析⁶⁾からまず、「女性（74.9%）」が多いこと、また「学歴」と「過去の職業」のいずれからでも、富裕層が多数を占めていることが老年人大学生の特徴としてあげられる。回答者の55.6%は、「高等教育レベル」の学校を卒業しており、「退職前の職業」も、「専門的職業（38.3%）」と「管理職（24.0%）」に就いていた人だけで、全体の62.3%を占めていたのである。

また、回答者の年齢層をみると、老年人大学の学生には「50歳代（37.4%）」の人が多数含まれていた。これは、中国の女性の定年が50歳（幹部は55歳）であることや、老年人大学の入学に年齢制限が設けられていないためだと考えられる。そこで本研究では、高齢者に絞って分析を行うために、回答者の

うち「50歳代」の人を分析対象から除外した（分析対象者は、412名）。

（２）調査結果の分析

高齢者の「生きがい」と「学習」との関係を分析する方法を示す前に、本研究での「生きがい」の捉え方について述べておきたい。

「生きがい」を『広辞苑（第5版）』で引いてみると、「生きるはりあい。生きていてよかったと思えるようなこと」とある。

また、神谷美恵子は、「生きがい」という言葉の使い方について次のように述べている⁷⁾。

生きがいということばの使いかたには、ふた通りある。この子は私の生きがいです、などという場合のように生きがいの源泉、または対象となるものを指すときと、生きがいを感じている状態を意味するときのと、このふたつである。このうち、あとのほうはフランクルのいう「意味感」にちかい。これをここでは一応、「生きがい感」とよぶことにして、前のほうの「生きがい」そのものと区別していきたい

前田大作らの研究の中でも、「生きがい」は2つの意味を持つものとして整理されている。それは、「個人の心の充実感としての生きがい」と「充実感を与える事物としての生きがい」である。前者は、『生きていてよかった』と感じている心の状態、あるいは『この生活は生きていて生活してゆく価値があると考え、しあわせであると感じている心の状態』を意味し、後者は、「人をして心に充実感、しあわせ感、あるいは『生きていてよかった』と思わせるような事物」を指す⁸⁾、という。

「研究の目的」でも述べたように、本研究における「生きがい」は、これらのうち、「生きがいを感じている状態」、あるいは「個人の心の充実感」を意味するもの、すなわち「生きがい感」として捉えたい。

「生きがい感」を客観的に測定するためには、その概念を操作的に定義する必要がある。上述した前田らの研究では、『「生きがい」という言葉の意味が、・・・個人の内面的、主観的なしあわせ感、あるいは心的な充実感をあらわしている』との理由から、それを「主観的な幸福感」と定義した⁹⁾。また、

中国語には「生きがい」に相当する言葉が存在せず、中国の表現では、『充実感』『満足感』『幸福感』が生きがい感、つまり生きがいを感じている精神状態を指す表現に近い⁽¹⁰⁾という。本研究でも前田らの研究同様に、「主観的な幸福感」を代替指標として採用し、「生きがい感」の分析を行うことにした。

この「主観的幸福感」を測定する尺度の一つに、ロートン (Lawton, M.P.) の「PGC モラール・スケール (Philadelphia Geriatric Center Morale Scale)」がある。アメリカではこの尺度を用いて、高齢者の生活満足度、モラール、幸福感等の研究が数多く行われ、また、その内的な構造や尺度の改訂等が繰り返し行われてきた。ロートン自身も、22項目からなるスケールを使用した調査結果を検討した後に、項目を5つ減らした17項目の「改訂 PGC モラール・スケール」を新たに作成している。

現在では、この改訂版が広く使用されているので、本研究でも「改訂 PGC モラール・スケール」を採用することにし、まずは因子分析により高齢者の「生きがい感」の構造を明らかにした。

次に、「生きがい感」の高揚に「学習」がどのような影響を与えているのかを明らかにしようと試みた。これについてはまず、『学習』に対する満足度が高まれば、『生きがい感』も高まる」との仮説を立て、「改訂 PGC モラール・スケール」から得られた「生きがい感」得点と「学習満足度」とのクロス分析を行った。さらに、数量化Ⅰ類を用いて、「学習満足度」に影響を与えている要因を探り、学習のどのような面が「学習満足度」や「生きがい感」を高めることに貢献しているのかについて考察した。

3. 天津市老年人大学の概要

(1) 老年人大学設置の背景

天津市は中国の中でも高齢化の先進地であり、高齢者教育の体制が整備された地域の一つでもある。その天津市の高齢者教育の出発点となったのが、天津市老年人大学の設置であった。

1982年、中国政府は幹部の終身雇用制度を廃止し、定年制を採用した。そ

の結果、社会問題となったのが、退職した政府の幹部の生活をどうしていくのか、ということであった。1983年当時、山東省では、退職した幹部や知識階級の高齢者の数が27万人にものぼったという⁽¹¹⁾。

また、1983年には、前年にウィーンで開催された国連高齢化に関する世界会議への参加をきっかけに、「老齡問題全国委員会」が設置された。この委員会は「老有所養，老有所医，老有所為，老有所学，老有所楽」を高齢者問題対策の基本方針とし、高齢者に対する扶養、医療とともに、高齢者の生きがいや学習の重要性を強調したのである⁽¹²⁾。

こうした動向の中で、同年、退職高齢者に生涯学習の場を提供するために、中国初の老年大学として山東省赤十字会老年大学が設置された。それ以後、中国各地で老年大学の設置が進められることになり、天津市老年大学も、その一つとして1985年4月に設置された。

天津市老年大学の学生数は、設立当初は4専攻、552名であった。しかし、2006年度には114専攻267クラス、8155名となっており⁽¹³⁾、現在、「大規模」、「多専攻」、そして「高水準」の総合的な老年大学へと成長している。

（2）老年大学の学習環境

天津市政府は、天津市老年大学を老年教育・老年教育研究の中心、そして全国でも一流の老年大学にするために、運営費の補助を行ってきた。2001年には老年大学の運営経費を市の正式な予算に組み入れ、その額は、初年度数万円レベルであったものが、2006年度には147.7万円となっている⁽¹⁴⁾。

また、2001年と2002年には、「老年大学校舎の修繕」と「老年大学の増築」のために、多額の費用を投じた。その結果、現在、7,300㎡という広大な敷地の中には、運動場、ホール、パソコンルーム、料理や園芸実習のスペース、ピアノや剣道やダンスの練習室、音楽や書道等の自習室、そして教室も50室ある等、充実した学習環境が整備されている⁽¹⁵⁾。

（3）老年大学の学習システム

学習システムは以下のとおりである。

天津市老年大学の学習目的は「知識の獲得、生活の豊富、情操の陶冶、健康の増進、社会奉獻⁽¹⁶⁾」であり、学習内容は、専門科目と一般教養科目と

に分かれている⁽¹⁷⁾。

まず専門科目は、「文学・歴史・外国語」、「書道」、「中国画」、「家政」、「身体健康」、「中医保健」、「ダンス演劇」、「音楽」、「コンピューター」の9部門からなる。年間の学習は、2学期に分かれており、専門科目は1学期15週間、毎週1回2時間（コンピューター、ピアノ等は3時間）の授業が行われる。学習年限の多くは、1専攻1年もしくは2年となっている。ただ、8割近い学生は、修了後も大学を卒業せずに、同じ専攻の上級レベルに進学するか、他の専攻で学び続けている。

次に一般教養科目は、毎週金曜日の午前中に開講されている。内容としては、幹部や専門家、学者による、時事や国の政策、思想道德、老年保健、芸術鑑賞等に関する講義が行われている。1985年～2000年までの統計をみると、講義内容は、やはり「老年保健講座」が全体の半分近くを占め、続いて「時事政策講座」、「文学芸術講座」の順となっていた⁽¹⁸⁾。

この他、学生の「第二教室活動(放課後の自主的な学習活動)」や「社团(クラブ)」も盛んである⁽¹⁹⁾。「社团」には、合唱団やダンスチーム、民楽チーム、京劇チーム、書道、中国画、ファッション研究会等、様々なものがあり、大学側は、これらの「社团」をあらゆる面(人力、物力、財力)から支援している。

こうした「第二教室活動」や「社团」活動は、天津市老年人大学で学ぶ学生に対して、学習意欲の喚起、コミュニケーションの促進、学生の才能の披露、大学生活の充実、社会活動への参加等、様々な面で重要な役割を果たしている⁽²⁰⁾。

4. 分析の結果及び考察

(1) 高齢者の「生きがい感」の構造

老年人大学で学ぶ高齢者の「生きがい感」について、その構造を明らかにしてみたい。以下では、「改訂 PGC モラール・スケール」を用いて、「あなたは次の質問についてどう考えておられますか。」という問に対して肯定的な回答に1点を与え、数値化して分析を行った。

表2 因子分析

質 問 項 目		第Ⅰ因子	第Ⅱ因子	第Ⅲ因子
心理的安定	4. 最近になって小さなことを気にするようになったと思いますか	0.470		
	7. 心配だったり、気になったりして、ねむれないことがありますか	0.544		
	11. 悲しいことがたくさんあると感じますか	0.575		
	12. あなたには心配なことがたくさんありますか	0.702		
	13. 前よりも腹をたてる回数が多くなったと思いますか	0.477		
	14. 生きることは大変きびしいと思いますか	0.416		
	17. あなたは心配事があると、すぐにおろおろする方ですか	0.518		
老いに対する満足感	2. あなたは去年と同じように元気だと思っていますか		0.435	
	8. 年をとるということは、若い時に考えていたよりも良いことだと思いますか		0.441	
	9. 生きていても仕方がないと思うことがありますか		0.395	
	10. あなたは、若い時と同じように幸福だと思いますか		0.680	
	15. 今の生活に満足していますか		0.578	
有用感	1. あなたは自分の人生が、年をとるにしたがって、だんだん悪くなっていくと思いますか			0.614
	3. さびしいと感じることはありますか			0.457
	6. あなたは年をとって前よりも役に立たなくなったと思いますか			0.667
固 有 値		5.066	1.544	1.299
因子寄与率 (%)		13.670	11.977	10.381
累積寄与率 (%)		13.670	25.648	36.028

まず、17項目からなる質問の合計得点をみてる。得点は、最高点17点から最低0点まで幅広く分散しており、平均値は11.939点であった。老年人大学生の「生きがい感」得点は、かなり高いといえよう。

次に、17項目について、主因子法に基づく因子分析を行った。分析の結果、初期解における固有値の減衰状況（スクリープロット）、さらに因子の解釈の可能性も考慮して、3因子が採択された。これらの因子に対して、バリマックス回転を行い、各因子に含まれる項目及び因子負荷量は、表2のとおりとなった。

回転の結果から、第Ⅰ因子は、「あなたには心配なことがたくさんありますか」や「悲しいことがたくさんあると感じますか」といった、心配事や悲しみにかかわる項目の因子負荷量が高かったため、「心理的安定」と命名された。第Ⅱ因子は、「あなたは、若い時と同じように幸福だと思いますか」や「今の生活に満足していますか」といった項目の因子負荷量が高かったために、「老いに対する満足感」と命名された。そして、第Ⅲ因子は、「あなたは年をとって前よりも役に立たなくなったと思いますか」や「あなたは自分の人生が、年をとるにしたがって、だんだん悪くなっていくと思いますか」といった項目の因子負荷量が高かったために、「有用感」と命名された。

各因子について、因子負荷量が0.35以上の項目（第Ⅰ因子：7項目、第Ⅱ因子：5項目、第Ⅲ因子：3項目）をそれぞれ合計した値を尺度とみなした場合、信頼性の指標であるクロンバックの α 係数は、第Ⅰ因子が0.795、第Ⅱ因子が0.681、第Ⅲ因子が0.651と、内部一貫性がみられた。そこで以下では、この3つのカテゴリーについて分析を進めていくことにする。

表3は、「老いに対する満足感」、「心理的安定」、「有用感」に含まれる質問項目について、自己評価してもらった結果をまとめたものである。

肯定的な回答に1点を与え、各カテゴリーの平均値をみると、「老いに対する満足感」に対する評価が最も高く（0.828）、次いで「心理的安定（0.687）」、「有用感（0.571）」の順となっていた。中位点が0.500であることを考え合わせると、老年人大学生は、「老いに対する満足感」に対する評価が非常に高く、現在の生活に関して積極的な認識を持っていることがわかる。一方、「有用感」に対する評価は、中位点は上回っているものの、相対的にもっとも評価が低くなっていた。

表3 平均値

質 問 項 目		平 均 値	
心 理 的 安 定	4. 最近になって小さなことを気にするようになったと思いますか	0.809	0.687
	7. 心配だったり、気になったりして、ねむれないことがありますか	0.601	
	11. 悲しいことがたくさんあると感じますか	0.773	
	12. あなたには心配なことがたくさんありますか	0.779	
	13. 前よりも腹をたてる回数が多くなったと思いますか	0.822	
	14. 生きることは大変きびしいと思いますか	0.558	
	17. あなたは心配事があると、すぐにおろおろする方ですか	0.466	
老 い に 対 す る 満 足 感	2. あなたは去年と同じように元気だと思っていますか	0.834	0.828
	8. 年をとるということは、若い時に考えていたよりも良いことだと思いますか	0.761	
	9. 生きていても仕方がないと思うことがありますか	0.834	
	10. あなたは、若い時と同じように幸福だと思っていますか	0.828	
	15. 今の生活に満足していますか	0.883	
有 用 感	1. あなたは自分の人生が、年をとるにしたがって、だんだん悪くなっていくと思いますか	0.528	0.571
	3. さびしいと感じることはありますか	0.644	
	6. あなたは年をとって前よりも役に立たなくなったと思いますか	0.540	

(2) 高齢者の「生きがい感」と老年人大学での「学習」

では、高齢者の「生きがい感」に老年人大学での「学習」はどう関わっているのでしょうか。図1は、老年人大学での「学習満足度」を「高位群」、「中位群」、「低位群」の3段階に分け、同じく3段階に分けた「生きがい感」得点とのクロス分析を行ったものである⁽²¹⁾。

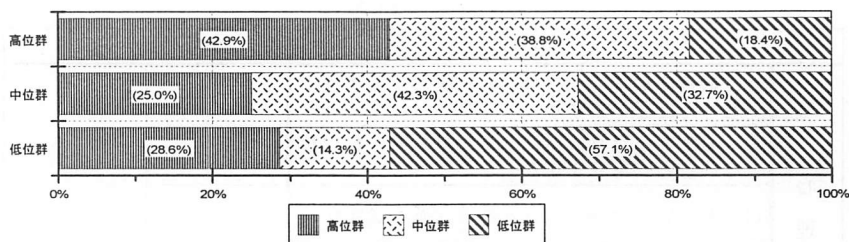


図1 「学習満足度」と「生きがい感」(縦軸が「学習満足度」)

(N=160)

その結果、「学習満足度」が「高位群」に属する人では、「生きがい感」得点が「高位群」の人の率が42.9%となっており、それは、「学習満足度」が「中位群」及び「低位群」に属する人の率を大きく上回っていた。一方、「生きがい感」得点が「低位群」の人の率は、「学習満足度」が低くなるにつれて高まる傾向も認められた。

この結果は、老年人大学での「学習満足度」の高さと、高齢者の「生きがい感」の高さとの間に密接な関係があることを示している。老年人大学での「学習満足度」を高めることが、高齢者の「生きがい感」を高める1つの要因となっているといえよう。

では、この「学習満足度」を規定している要因は何なのか。以下では、数量化I類を用いて、「学習満足度」を目的変数、「学習目的⁽²²⁾」、「学習意欲」、「学習継続年数」、「社会参加に対する効果」を説明変数として設定し、分析を行った。

その結果を示したのが表4である。

まず、「学習満足度」の規定要因として、どの説明変数が相対的に強く働いているのかをみる。レンジをみると、「社会参加に対する効果」が0.520と最も数値が大きく、「学習意欲」が0.498でそれに続いている。このことから、この2つの変数が、「学習満足度」の強い規定要因であるといえる。

次に、レンジの大きかった2変数のカテゴリー数量に着目してみる。

まず、「社会参加に対する効果」のカテゴリー数量をみると、社会活動への参加意欲を高める効果が「非常にある」と回答した「高位群」の人の数量が

表4 学習満足度の規定要因

説明変数	カテゴリー	N値	カテゴリー 一数量	レンジ	単相関 係 数	偏相関 係 数
学習目的	表出志向	77	0.021	0.059	0.053	0.041
	道具志向	50	-0.038			
	活動志向	98	0.003			
学習意欲	高位群	78	0.177	0.498	0.362	0.259
	中位群	121	-0.045			
	低位群	26	-0.321			
学習継続年数	1～2年目	83	-0.055	0.116	0.077	0.088
	3～4年目	66	0.060			
	5年目以上	76	0.008			
社会参加に対する 効果	高位群	33	0.322	0.520	0.377	0.266
	中位群	134	0.006			
	低位群	58	-0.198			

$$R^2 = 0.204$$

(N=225)

もっとも大きく、一方、「低位群」の人の数量がもっとも小さくなっていた。これは、「社会参加に対する効果」の評価が高まるほど、「学習満足度」も高まることを示している。また、「学習意欲」のカテゴリー数量をみても、「社会参加に対する効果」と同様、学習への意欲が高まるほど、「学習満足度」も高まる傾向が認められた。

高齢者の老年人大学での学習目的をみると、「心のハリや生きがいを味わえるため」とともに、「学ぶことや向上すること自体にやりがいがあるため」や「人間としての知識を広げたり、理解を深めるため」といった、学習活動そのものを深めたり、楽しむことが主な目的となっていた（表5）。

それだけに、この2つの要因のうち、学習に対する積極的な姿勢が、学習の満足感を高め、結果として彼らの「生きがい感」を高めることにつながっている、という流れは、容易に理解することができる。今後、高齢者の学習ニーズを的確に把握し、それに応じた学習機会を提供していくことが重要な

表5 学習目的

		%			%
表 出 志 向	人間としての知識を広げたり、理解を深めるため	14.3	活 動 志 向	人と知り合ったり、社会とのつながりを保つため	2.8
	学ぶことや向上すること自体にやりがいがあるため	15.1		心のハリや生きがいを味わえるため	27.5
	人間として自立するため	0.4		若さを保ったり、老後の防止になるため	12.0
	人間としての考える力や行動力を形成するため	2.8		その他	2.0
道 具 志 向	仕事や生活に役立てるため	4.4	(N=251)		
	体をきたえ、健康を維持増進させるため	15.1			
	時代や世の中の変化に遅れないため	3.6			

課題となろう。この点について、天津市老年人大学では、多くの専攻で、学習内容を基礎、レベルアップ、研修の3段階に分け、学生のニーズや能力に応じたプログラムを提供している⁽²³⁾。

一方、「社会参加に対する効果」が、「学習満足度」の強い規定要因であるとは、筆者自身、分析を行うまで考えていなかった。というのも、老年人大学で開講されているプログラムは、「趣味」や「健康」に関するものがほとんどであり、学習目的をみても、「仕事や生活に役立てるため(4.4%)」や「人と知り合ったり、社会とのつながりを保つため(2.8%)」をあげた人の率は非常に低かったからである。

しかしアンケート調査とともに現地で行われた、10名の学生の聞き取り調査の結果を分析する中で、両者の関係の深さが明らかとなってきた。彼らは、「詩」、「書道」、「絵画」、「ピアノ」、「コンピューター」等、それぞれの興味・関心に合わせて様々な学習を行っていたが、多くの人の話から共通に出てきたのは、「老年人大学で多くの仲間と出会い、交流している」、そして「老年人大学で学んだことを身近で生かしている」という話題だったのである⁽²⁴⁾。

「老年人大学での仲間との出会いと交流」については、例えば「10年間絵をやってきて、友達がたくさんできたし、年下の先生とも仲良くなった」、「絵

をやり始めて新しい友達ができ、週末や祝日に誰かの家に集まって交流したりしている」、「ここに入学して、人生はずいぶん変わった。新しい友達も増えた」といった話が聞かれた。また、「老年人大学で学んだことを身近で生かしている」ことについては、例えば、マッサージについて学んだ人が「家族や近所の人にやってあげて、喜ばれている」、カメラで撮った写真をパソコンで画像処理する方法を学んだ人が「結婚式の手伝いをしている」、あるいは、歌を学んだ人が「家で歌うだけでなく、学園祭の時はいつも頼まれて歌っている」といった話が聞かれたのである。他にも、老年人大学での学習で知識を身につけ、老年人大学の講師になった人もいる、という。

以上のことから、老年人大学の学生は、「趣味」や「健康」の学習を通じて、「自己の欲求」を満たすだけでなく、社会とつながっている、といえそうである。ただ、社会とつながろうという意識は、老年人大学に入学した当初から、明確に学生の中に存在していたわけではない。学習を長期にわたって継続する中で、共通の趣味をもった仲間との交流が生まれ、また、学んだ成果を様々な形で生かす機会に恵まれるようになったのである。そして、そうした学習に付随して生まれた交流や活動が、学生自身の生活や人生を豊かにしているという実感が、彼らの学習満足度を高めることにつながったといえよう。

また、学習の「社会参加に対する効果」は、「学習満足度」に影響を与えただけでなく、「生きがい感」の中の「有用感」とも密接に関わっていた。

図2は、老年人大学における学習の「社会参加に対する効果」の評価を、

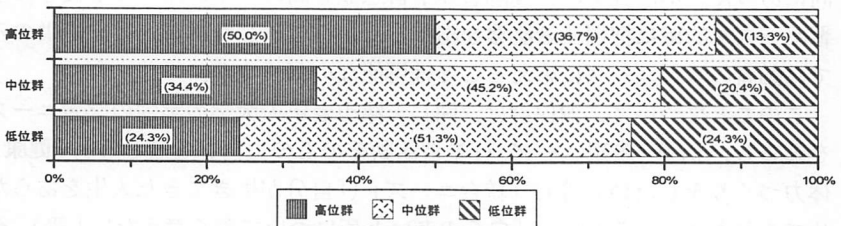


図2 「社会参加に対する効果」と「有用感」

(縦軸が「社会参加に対する効果」)

(N=160)

「高位群」、「中位群」、「低位群」の3段階に分け、同じく3段階に分けた「有用感」得点とのクロス分析を行った結果である。

その結果、「有用感」得点が「高位群」の人の率は、「社会参加に対する効果」の評価が「高位群」に属する人の50.0%を占め、それは「中位群」及び「低位群」に属する人の率を大きく上回っていたのである。高齢者の社会活動への参加意欲を高めることは、彼らの「有用感」を高め、結果として「生きがい感」を高めることにつながるといえよう。

5. 今後の課題

最後に、本研究の限界と今後の課題について明らかにしておきたい。

まず、今回の研究対象は、「退職前の職業」にしても、「学歴」にしても、一般の高齢者と比べるとかなり高いレベルにある人たちであった。今後、一般の高齢者を対象とした調査も行い、「生きがい感」と「学習活動」に関する研究をさらに深めていく必要がある。

また、学習満足度の規定要因を探るために数量化Ⅰ類による分析を行った結果、決定係数 (R^2) は0.204であり、説明力があまりよいとはいえなかった。今後、学習満足度にどのような要因が影響を及ぼしているのかをさらに検討する必要がある。

中国の高齢者教育の今後の課題としては、学習内容の問題を指摘しておきたい。老年人大学での学習内容は、「趣味」や「健康」に関する内容に偏る傾向にあった。本研究では、高齢者の学習意欲を高めるために、まず彼らの学習ニーズを的確に把握する必要を指摘したが、こうした学習内容の提供のみで高齢者の学習ニーズに応えることは可能なのだろうか。

このことについて、謝保群は、同じ天津市老年人大学の学生の学習ニーズを調査し、「対処・表現ニーズ」(「学習活動そのものに喜びを感じる」、「健康・体力づくりをしたい」等)、「統合ニーズ」(「自分が生きてきた人生をあらためてふりかえってみたい」、「自らの老いと死について深く考えたい」等)、そして「貢献ニーズ」(「ボランティア活動に必要な知識・技能を身につけたい」、「自分の経験・技能や伝統・文化などを若い世代に伝えたい」等)という、

3つのニーズを確認している⁽²⁵⁾。

この3つのニーズのうち、「対処・表現ニーズ」を構成する項目への肯定的回答率は高く、その結果から、老年人大学が高齢者に対して「趣味」や「健康」関連の学習機会を提供することの意義が確認できた。しかし同時に、「貢献ニーズ」も高齢者の学習意識の中に存在していたのである。謝保群は、この点に注目し、「高齢者の社会参加活動、ボランティア活動を取り入れる学習プログラムを編成するとともに、高齢者が学習成果を社会参加活動に活かす機会を創出し、そうした学習支援体制の整備を行うこと⁽²⁶⁾」を今後の課題としてあげている。

本研究でも、「貢献ニーズ」を明確に確認することはできなかったが、社会活動への参加意欲が高められたことが、高齢者の「学習満足度」や「有用感」を高めていることを明らかにした。この結果は、先行研究と同様に、高齢者の社会参加を意識した講座の開設、そして学習成果の活用支援の充実がこれからの高齢者教育の重要な課題であることを示している。これらの課題が解決され、学習成果を実際に生かすことの喜びを多くの高齢者が知ることができれば、彼らの「学習満足度」、そして「生きがい感」はさらに高まるであろう。

〈注〉

- (1) 若林敬子編著『中国人口問題のいま—中国人研究者の視点から—』ミネルヴァ書房、2006年、p. 29。
- (2) 謝保群『中日両国における高齢者生涯学習支援体制の現状と課題』風間書房、2007年、p. 11。
- (3) 『中国の高齢者事業の発展』中華人民共和国国務院報道弁公室、2006年（訳は http://japanese.china.org.cn/politics/archive/baipishu/node_7014498.htm を参照）
- (4) 高橋勇悦、黒岩亮子「中国における都市高齢者の『生きがい』」『総合都市研究（第69号）』東京都立大学都市研究所、1999年、p. 109。
- (5) この調査は、中国の高齢者の学習実態と、彼らの「生きがい」及び「自己主導的学習（self-directed learning）」能力の特質を明らかにするために、筆者が所属する滋賀大学生涯学習教育研究センターによって実施された。調査期間は、2006年9月11日～18日であり、その期間中、天津市老年人大学の受講者にアンケート用紙を直接配布し、回収した。

- (6) 「現在、何らかの職に就いている」人の率は17.6%である。また、「家族構成」は、「配偶者と一緒に暮らしている」人の率が61.1%でもっとも高く、次いで「二世代で同居している(22.8%)」となっていた。
- (7) 神谷美恵子『生きがいについて』みすず書房, 1980年, p. 15。
- (8) 前田大作, 浅野仁, 谷口和江「老人の主観的幸福感の研究—モラル・スケールによる測定の試み—」東京都老人総合研究所『社会老年学 No. 11』東京大学出版会, 1979年, p. 15。
- (9) 同上論文, p. 16。
- (10) 前掲書(2), p. 150。
- (11) 同上書, p. 129。
- (12) 謝保群「中国における高齢者教育の現状と課題」『関西教育学会紀要28』関西教育学会, 2004年, p. 66。
- (13) 「開拓革新する天津市老年人大学」(訳・注 張艶)『滋賀大学生涯学習教育研究センター年報2006』滋賀大学生涯学習教育研究センター, 2007年, p. 21。
- (14) 同上資料, p. 23。
- (15) 同上資料, p. 23。
- (16) 前掲書(2), p. 138。
- (17) 前掲資料(13), p. 22。
- (18) 前掲書(2), p. 138。
- (19) 前掲資料(13), p. 22。
- (20) 同上資料, p. 22。
- (21) 「改訂 PGC モラル・スケール」の17項目すべてに回答した人を対象としているために、対象者数は160名となっている。
- (22) 「表出志向(学習を行うこと自体に意義を見いだす)」、「道具志向(学習行為の外部に置かれる目標を達成するために学習を使用する)」、「活動志向(学習目的や内容よりも、学習活動に付随する人間関係や機会の利用を目標とする)」に含まれる項目については、表5を参照。
- (23) 前掲資料(13), p. 21。
- (24) 2006年9月12日~14日の間に、50代~70代の男女5名ずつから、1人30分程度の聞き取り調査を行った。その詳しい内容については、梅田修「受講生に対する聞き取り調査報告」『滋賀大学生涯学習教育研究センター年報2006』滋賀大学生涯学習教育研究センター, 2007年, pp. 17-20を参照。
- (25) 前掲書(2), p. 157。
- (26) 同上書, p. 167。